２０２２年１月２３日顕現後第３主日

ネヘミヤ記 8 章 2-10 節
コリントの信徒への手紙一 12 章 12-27 節
ルカによる福音書 4 章 14-21 節

新しい年を迎えまして、すでに半月以上が過ぎました。先週、教会委員任命式を行い、礼拝後、新旧合同の教会委員会を行いましたが、礼拝がＡＢに分かれておりますので、教会委員任命式は、今週も行います。新しい年はもう始まっていますが、残念ながら、まだコロナ禍がおさまりません。堅信受領者総会も、対面式とリモートと併用と思っていたのですが、感染状況を考慮して、文書開催に変更となりました。1 月も半分を過ぎたとも思えますが、２０２２年は、始まったばかりです。今年は、わたしたちの東京聖三一教会の歩みについて、教会委員会の構成やあり方などを始めとして、皆さまと一緒に、あらためて深く考える年となると思います。今年もイエス様を仰ぎ見つつ、歩みたいと思います。始まりという観点で見ますと、本日の旧約日課と福音書は、何かの始まりにふさわしい個所といえます。

旧約日課は「ネヘミヤ記」です。この文書は、「律法・預言・諸書」という本来的『（旧約）聖書』の名称から言えば、「諸書」に属し、ことに歴史について記している文書です。「ネヘミヤ記」は、本来は「エズラ記」と一つであったと言われています。内容的には連続しており、バビロン捕囚が終了し、イスラエル・ユダヤ人たちがユダヤに戻り、神殿を再建する物語が記されています。ことに本日の箇所は、７章で神殿の完成（再建）が告げられ、捕囚から帰還した人々の数が確認され、彼らが集められて、律法の書が読まれる個所の続きです。その始まりは、聖書日課の直前の部分ですが、「**第七の月になり、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。彼らは書記官エズラに主がイスラエルに授けられたモーセの律法の書を持って来るように求めた。**」（ネヘミヤ 7：72～8：1）となっています。その後、本日の聖書日課に続くのですが、そこには「**祭司エズラは律法を会衆の前に持って来た。そこには、男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日のことであった。**」（ネヘミヤ８：2）とあります。「律法」とはもちろん、モーセ五書の部分ですが、巻物であったと思いますので、結構な本数の巻物が運ばれてきたのでしょう。

さて、「**そこには、男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた**」とありますが、この短い記述は、重要なことを示しています。第一に、「**男も女も**」とあることです。７章６６節によれば、「**会衆の総数は、四万二千三百六十人であった**」のですが、それは原則男子の数です（ネヘミ

ヤ７：7)。しかし、ここでは男女の区分なく明記されているのです。一般的に『聖書』は、男女平等の視点がないと批判されることがあり、実際時代の文化的制約もありそのような批判が当たる部分もあります。しかし、この箇所ではその批判は当たりません。「律法」を読み、それを聞くという、主なる神様と人間とが相対するような場面では、男女の区分は重要ではないのです。

第二は、「**聞いて理解することのできる年齢に達した者**」という表現です。現在のユダヤ教では、「律法」を理解できる年齢を成人（宗教的な意味ですが）として、「バール・ミツバ」（男子１３歳）、「バット・ミツバ」（女子１２歳）としてお祝いします。「ネヘミヤ記」の時代にはそのようなお祝いはなかったと思いますが、それぐらいの年齢の人から長老たちまで、すべての男女が集まって、律法を聞くというのが本日の旧約日課の場面です。今日的な意味での成人だけではないのです。これは、神殿が再建され、イスラエル・ユダヤ人の歩みが新たに始まる最初にふさわしい光景といえますが、残念ながら、小さな子どもたちは、対象ではなかったようです。

続いて「**彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた**」（ネヘミヤ８：3）とあります。モーセ五書をすべて読むのに、「**夜明けから正午**」かかったようです。このお話の日時は、「**第七の月になり**」（ネヘミヤ７：72）とありましたので、今の暦ではだいたい１０月です。この出来事が１０月何日かはわかりませんが、今年２０２２年エルサレムの夜明け（日の出）は、１０月１日で６時３３分だそうです。今年の場合は、５時間半弱で読み終えたことになります。音読したのだと思いますが、日本語で実際に呼んでもそれぐらいでしょうから、実に現実的な時間が記されていると思います。

最後の方で、律法が読まれたとき、ネヘミヤとエズラは、「**今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない**」（ネヘミヤ８：9）と喜びなさいと人々に語ります。それは、「**民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた**」（ネヘミヤ８：9）からです。その涙は、感激の涙だと思うのですが、そうであってネヘミヤとエズラは、喜びなさいと伝えます。なぜならば、「**行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である**」（ネヘミヤ８：10）からです。そして、聖書日課では省略されていますが、「**民は皆、帰って、食べたり飲んだりし、備えのない者と分かち合い、大いに喜び祝った。教えられたことを理解したからである**」（ネヘミヤ８：12）とお話は終わります。主なる神様が、イスラエル・ユダヤ人を愛するしるしともいえる「律法」は、喜びにほかならないのです。そして、その喜びを、飲食を共にして祝うというのが、イスラエルらしさなのです。

さて、旧約日課は、ここまでですが、続くお話は、「（第７の月の）**二日目に、すべての民の家長たちは、祭司、レビ人と共に書記官エズラのもとに集まり、律法の言葉を深く悟ろうとし、主がモーセによって授けられたこの律法の中にこう記されているのを見いだした。イスラエルの人々は第七の月の祭りの期間を仮庵で過ごさなければならず**」（ネヘミヤ８：13-14）と「仮庵の祭り」があります。この「仮庵の祭り」は、ユダヤ教の三大祭りの一つです。この「仮庵の祭り」が終わると、現在は「律法歓喜祭（シムハット・トーラー）」があります。この祭りの起源は、新しいと思いますが、現在のユダヤ教では、「モーセ五書」を一年間かけて読みます。その読み終わり、そして新たな読み始めが、この「律法歓喜祭（シムハット・トーラー）」にほかなりません。

喜びをもって迎えるべき大切な「律法」ですが、このお話では、律法が前もって整った形ですでに存在していることが前提となっています。実際的には、現在の形の「モーセ五書」が整ったのは、このころからであるとも推測されます。しかし、「律法」を大切にすることを、改めて確認したという意味では、本日の旧約日課のお話は大切なことを示していると思います。しかし、その大切な「律法」は、主なる神様が望むとおりに守られてきたわけではありませんでした。ことにイエス様の時代には、「律法」を厳密に守ろうとする人々も多かったと思うのですが、それらの人々歩みは、主なる神様の御心にかなった行いではなかったのです。

本日の福音書は、イエス様がナザレの会堂で、安息日に『（旧約）聖書』を読まれた箇所です。「**イエスは霊の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。 15 イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた**」（ルカ 4：14-15）とイエス様の活動記録をまとめて述べていますので、イエス様のすべての活動の始まりの箇所というわけではありません。また、「**イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった**」（ルカ 4：16）とも記述していますので、すでに成人してからナザレの会堂で、当番として何度か『聖書』を朗読していたのかもしれません。しかし、イエス様が朗読された後、「**イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた**」（ルカ 4：20）とあります。諸活動で教え、また皆から尊敬を受けたと言われている、あのよく知っているナザレのイエスが、いったい何を話すだろうか、故郷の人々が注目したという意味では、何かが始まる、始まりの部分といえると思います。ただし、本日の福音書は、「**そこでイエスは、『この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた**」（ルカ 4：21）で終わっています。お話の途中で終わっていますので、続きは来週、となっています。実際、来週の福音書は、同じ４章２１節から始まっています。

イエス様が読まれた『聖書』は「イザヤ書」６１章１節２節と４２章７節です。本日の旧約日課とは異なります。ただし、「主のしもべ」に油が注がれ、その人が貧しい人への福音を告げ、困難な中にある人に解放を行うという、主なる神様の救いの言葉があります。「イザヤ書」自体には、その「主の僕」が誰であるかは明記されていないのですが、わたしたちにとっては、イエス様にほかなりません。その意味では、ここイエス様が読まれた『聖書』は、イエス様の活動の開始を告げる箇所、またその活動の内容を示す箇所の言葉だといえます。

イエス様がナザレの会堂で『聖書』を読まれた光景は、旧約日課の光景、すなわち、エルサレムの神殿再建を記念して、イスラエル・ユダの人々のすべてを集めて律法が朗読された光景に比べると、規模は小さいのです。しかし、その意味はより大きな内容を持っています。なぜならば、そこで語られた福音と救いの業が、イスラエル・ユダという文化・歴史的な枠組みを超えて、またイエス様の時代という時間の枠組みを超えて、現代のわたしたちにも有効であるからです。そして、これからも有効であるからです。

教会は、そのイエス様の活動、言い換えれば福音宣教の活動によって、集められた人々によって形成されます。それゆえ、教会に集められた人々には、その宣教を受けたものとして、他にはない喜びがあります。それはちょうど、「ネヘミヤ記」の書記官エズラが、「**今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である**」（ネヘミヤ８：10）と人々に告げたことと同じです。わたしたちが、主に愛され、そる喜びを告げ続けるからこそ、イエス様の福音宣教の活動は、教会を通して、時間と空間を超えて、社会に示されるのです。その意味では、教会とは、いつの時代のどの教会も完成した形があるのではなく、常に生成途中の集まりです。今年わたしたちは、代沢の地に来て６０年を超える時を経過したことを前提に、また、まだ続くコロナ禍のことも考慮しながら、教会の歩みを考えなければなりません。言い換えれば、今までの課題と、コロナ禍の時固有の課題を考えなければならないのですが、それは教会が教会であり続けるために、主に愛されていることの喜びが基になければなりません。

本日の使徒書は、パウロはコリントの教会にあてた手紙です。その中でパウロは、教会形成について、大切なヒントを示しています。それは、様々な課題があったとしても、教会とは、人間の身体が様々な異なる部分から一つの体を構成するように、教会も同じであるという論理です。この論理は、極めて単純であると同時に説得力があります。主イエス・キリストを通してつながっている喜びが根底にあるからです。

皆さまの喜びとたまものを組み合わせて、これからもわたしたちの教会を形成していきたいと思います。そして、この世界にはない交わりと喜びを伝え続けたいと思います。